

桑名文化協

新春六華苑祭

新春茶会

茶華香道部門

伊藤

宗五

(遠州流)

平成25年3月15日

第 33 号

桑名市文化協会
桑名市中央町2丁目37
TEL 24-1361
<http://bunkyo-kuwana.jp>

一月二十日に開かれた新春六華苑祭で、遠州流が月釜茶会を担当させて頂きました。アルジェリアの人質事件が起きるなど、年明け早々暗いニュースに包まれましたが、せめて茶会では「明るく希望に満ちた年でありますように」との願いを込め、お客様をお迎えいたしました。

寄付には、今年のお題「立」にちなんだ扇面の若緑和歌、本席には大徳寺・江雪和尚の富士画賛、香合や茶碗なども初春の目出度さを寿ぐ道具組みにいたしました。

茶会には市長さんもお見えになり一服。同席の方から「お茶は、書画から陶・漆芸、建築、庭園まで含めた日本文化の集大成です。ぜひ、興味を持っていただきたい」との話もあり、お茶談義で盛り上がる一幕もありました。

当日は暦の上では大寒。その名のとおり肌寒い一日でしたが、多

くの方に足を運んでいただきました。慣れない席主で、どれだけのもてなしができたか自信はありませんが、帰りの際に「楽しいひと時を過ごさせていただきました」の言葉をいただき、多くの方との出会いに感謝した一日でした。



六華苑祭から始まる美術部門展



美術部門 松井 勝
(精義孔版画アートの間)

第9回新春六華苑祭が、1月19日 苑内番蔵棟で開催されました。

六華苑が開苑以来、この地から桑名の文化を発祥していくということが始まりました。洋館、和館や蔵、池泉回遊式庭園などがあり、落ち着いた中で人々が語らい、憩い、交流できる此処は絶好の場所であります。

会場の関係で参加者を絞らざるを得ないのが残念でした。

展示点数は、絵画15点、書道4点、写真8点、陶芸14点、彫型画3点、ちぎり絵2点、染色1点、孔版画2点、合計49点でした。

離れ屋では茶華香道部門の月釜茶会も併催され、初春の一服から至福の時を感じさせる日でありました。



奇く 新春六華苑祭

新春六華苑祭担当

副会長 荒木 敏文

第9回新春六華苑祭は、桑名市文化協会の理事会共同企画として、1月19・20日の二日間、六華苑の洋館・和館・番蔵棟・離れ屋・芝生広場を会場として、邦楽の演奏・お茶会・美術展・オカリナ・マンドリンの演奏等開催致しました。

天候にも恵まれ、加盟団体有志による日頃の成果の発表の場として、多くの来苑者に見て頂き、また、楽しんで頂いたものと思っております。特に、芝生広場では、多度雅楽会による雅楽・伊藤好子&ダンシングステップの子どものダンスは、毎年好評を得ているところであります。

さて、六華苑(旧諸戸清六邸)は山林王と呼ばれた桑名の実業家二代目諸戸清六の邸宅として大正2年に竣工し、昨年、創建100年を迎えました。この創建100年記念事業として、大茶会・華道展・講演会、六華苑フォトコンテスト・各種演奏会を開催し、4000人余の来苑者がありました。

新春六華苑祭は来年に第10回を迎えます。文化協会としましては、平成25年度の重点事業として六華苑祭を位置づけ、市民の皆様楽しんで頂ける事業を計画し、節目の10年

を、文化協会会員でお祝いしたいと思えます。
終わりに、伊藤徳宇市長さんには、公務ご多忙の中、六華苑祭開会時にご挨拶を賜りましたことに対しまして、厚くお礼申し上げます。



桑名市民芸術文化祭

市民芸術文化祭を終えて

音楽部門 伊藤 清美
(オカリナ・くわなも)

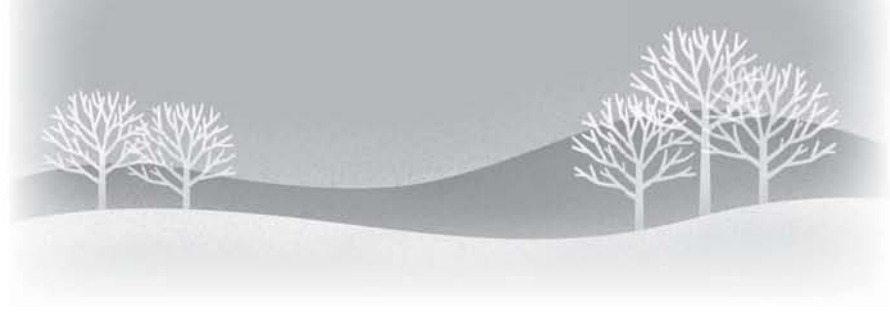
したものになると確認しました。そしてすぐ六華苑祭の参加に繋がったのですから。皆さんに感謝します。

私たちは今まで、老人施設等でオカリナ演奏活動を続けてきました。昨年、文化協会に入り、市民芸術文化祭の行事である、音楽のフルコースという大きなイベントに参加することに決めた時は、二十名の会員全てが、ゼロからの出発で何も知らない状態でした。

講師の指導のもと、曲選びからステージの構成、ピアノと打楽器の伴奏で演奏することなど、何度も練り直し、練習を重ね、何とか形になったのは、本番ギリギリだったのです。

不安や焦りはありましたが、本番までの取り組みは新鮮で、皆で音楽を作り上げる喜びや楽しさを味わうこともできました。この過程で、私たち「くわなも」の絆も深まり、やる気も育ち、集中力もぐんと高まったのは成果でした。

お客様に楽しんでもらい、私たちも楽しむこと!!いつもボランティア活動で心がけていることを、このステージでも全力で出せたいと思います。終わった後の皆の笑顔でこれからの活動がより充実



『マリッツ・ブルー?』

演劇部門 相原 千景
(演劇集団Cブレンド)

私たちが、演劇集団Cブレンドは、平成24年11月23日〜25日、桑名市民会館小ホールで、第8回公演「マリッツ・ブルー?」を上演しました。これまでではメディアライヴで細々と公演を行ってきましたが、今回は市民芸術文化祭に参加させていただいたおかげで、念願の小ホール公演です。物語は、結婚式の舞台裏を描いたドタバタコメディ。従業員、三組の新郎新婦、それぞれの招待客たちが、あれやこれやと揉めながら入り乱れます。桑名市民会館の小ホールは、音楽発表に適したコンサートホール調のしつらえ。照明業者さんのお力のおかげもあり、ロマンティックな結婚式の雰囲気が出て、舞台と客席が一体となった演劇空間が実現しました。

芝居のほうは、「誰かの結婚式に招待されたように、お客様に幸せな気持ちになって帰っていただく」という目標を立て、稽古をしてきました。終演後、送り出しをする役者たちに、たくさんのお客様が声をかけてくださいました。花嫁役の役者に「おめでどう。よかったね」と言ってくださったお客様。従業員役の役者の手を取って「感動しました。ありがとうございます」と泣いてくださったお客様。目標達成だねと、団員みなで喜び合いました。

もちろん、初めての小ホール公演ということもあり、たくさんのお客様も見えましたが、今回の公演で学んだことを活かして、お客様にいただいた元気をともに、年明けからの活動に奮闘していきます。2月2日には桑名演劇塾公演に参加、また3月9日10日には、劇団がおさんと合同公演として柏崎市との文化交流に参加しました。

最後になりましたが、上演に際しあたたかいご協力をいただいた会館スタッフの皆様、お世話になり、ありがとうございます。そして、桑名市文化協会様には、文化祭参加事業としてご支援を賜りましたこと、あつく御礼申し上げます。ありがとうございます。来年度も、演劇集団Cブレンドを、どうぞよろしくお願ひいたします。



くわコレ'12、展示会を終えて

趣味教養部門 後藤 智子
(日進編物教室)

納得のいく作品が仕上がる様がんばります。



昨年十月二十日はくわコレ'12を發表し、二十一日は展示会をいたしました。ショーにおいては、ショー自体の演出も大変ですが、今年の流行やコーディネートにも気を配ります。翌日の展示会は、その作品を間近にみていただき、手作り小物、細かい手作業のレース編みや織物も展示します。まさに、一年間フルに手掛けた作品ばかりです。生徒も先生も一人一人この日に向けて仕上げていく意気込みがあります。作品もそうですが、三教室合同ですので、何度も打合せしたり、各方面に足を運んだりと何とか、その日を迎えます。

当日は、準備、リハーサル、本番、かたづけとクタクタになっても、夕方より展示会の設営と一日が過ぎていきます。

後日、ショーを見て下さった方が「作品が見応えがあり、又、来年見せて下さい」と言ってくれました。大変喜んでいただきました。又、来年に向けて手が動き出しました。この様にファッションショーを開催出来る事、講師、会員共々、文化協会には大変感謝しております。又、来年度に向けて少しでも



新春懇親会

新春懇親会担当

副会長 森 一蔵

新春六華苑祭の初日の夜、苑内のレストランと結婚式場を兼ねたRoccaで平成二十四年度の桑名市文化協会新春懇親会が開催されました。本年度桑名市文化功労者として、会員で前会長の加藤武夫氏が演劇部門より受賞され、水谷会長より披露があり、加藤氏本人の挨拶の言葉をいただきました。昨年に引き続き当協会からの受賞者は誠に喜ぶべきことです。

多くの来賓者と共に新しい顔ぶれの特別会員の御参加は、心強いものがあります。アトラクションのフラメンコ・ルナの皆さんは舞台設定からの意欲ある発表で、いつも乍ら踊りのフラメンコは感動しました。六華苑祭からの直接参加の女性会員の和服姿は会場に花を添えた雅な光景の演出でした。

分野の違う方々と心を開いて交流し歓談することは、創作の閃きと意欲を掻立ててくれます。夫々携わるものは違っても目指すものは同じところ、という快いものがあります。

初春の寒中の一夜、心温まる懇親会を終え家路に着きました。



桑名市文化功労者 表彰を受けて

演劇部門 加藤 武夫

この程桑名市長から今年度の文化功労者表彰を受けました。驚きと共に支えて頂いた皆さまにお礼の気持ちで一杯です。

これまで演劇活動51年、その中に文化協会会長として6年ありますが、微力ではあります。一生懸命に務めさせて頂いていただきました。文化協会会長在任中に創立15周年を迎え、記念の文化祭を実施したり、六華苑での「新春六華苑祭」や、会員の懇親会も試行しましたが、毎年にぎやかに継続発展していることは、嬉しいことであります。

活動の分野にもありますが、一人でできるというものはありません。仲間の協力は当然でありますし、観客、スポンサー、関係当局と皆様の支援無くして成り立ちません。35年前に劇団の稽古場を新築した時も、多くの方のご支援をいただきました。公演終了時のお客様のお見送りに、小さな子どもさんがカンパをしてくれました。友達に「そんなことしたら帰りのバス代が無くなるよ」と言われ「私は歩いて帰るんでいいよ」とカンパしてくれたという。そんなかわいさしい支援者もいました。

51年間演劇の公演回数は500回を超えますが、どれも忘れられない公演活動の数々でした。員弁郡の学校移動巡回公演は15年続きましたが、

その中で児童や先生方に育てられました。23年前の初めての韓国公演、アイルランド公演。鹿児島公演での「孤愁の岸」。何の見通しも無く数人の知人を頼って公演を企画したものです。薩摩義士顕彰会を始めライオンズクラブ、前鹿児島大学学長のネットワーク等と隣り間に広がりをみせ、1600名の県民ホールが満員止めにになりました。終演後は観客がすぐに立ち上がり感動の拍手喝采でした。

今も続く韓国やアイルランドとの文化交流や、柏崎市との文化交流がもつともっと大きくこの輪が膨らんで行ってもらいたいと願っています。今になって...であります。私にとって後継者を育てられなかったという反省があります。私も、古希を過ぎましたが、残された時間この反省に立ってこれからも地域の文化の発展に貢献できればと思えます。



平成二十五年度月釜・華道展日程表

と き 土曜日・午後一時～五時 日曜日・午前十時～午後三時半
 ところ [月釜] 六華苑 離れ屋 [華道展] 番蔵棟
 前売呈茶券 七百元(入苑料込) 当日券 五百円(入苑料別)

四月十三日(土)は県民の日を記念して、
 入苑料が無料となります。

開催日	茶道担当流派	華道担当流派
平成二十五年 四月十三日(土) 十四日(日)	(十三日のみ) 松尾流	MOA山月光輪花
五月二十五日(土) 五月二十六日(日)	(二十六日のみ) 煎茶松風流	華道家元池坊
六月十五日(土) 六月十六日(日)	(十六日のみ) 遠州流	石田流
九月十四日(土) 九月十五日(日)	(十五日のみ) 表千家流	竹真流
十月十九日(土) 十月二十日(日)	(二十日のみ) 裏千家	未生流中山文甫会
平成二十六年 一月十九日(日)	裏千家	休会
二月十五日(土) 二月十六日(日)	(十六日のみ) 表千家流	小原流
三月十五日(土) 三月十六日(日)	(十六日のみ) 遠州流	草月流

桑名市文化協会育成補助金

募集のお知らせ

桑名市文化協会では、桑名市の芸術文化振興のため、文化協会会員が企画して行う事業に対して補助金を交付します。つきましては平成25年度の育成補助金募集案内をいたします。

◎応募受付期間

平成25年3月4日(月)～
 4月5日(金)
 (平成25年4月1日～平成26年3月31日までの実施事業に限る)

◎申請の制限

平成23年度・24年度に補助金助成を受けた団体・会員は交付申請できない。

◎お問い合わせ

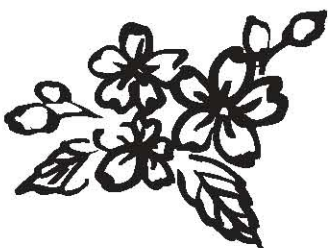
桑名市文化協会事務局
 (桑名市教育委員会 文化課内)
 TEL 0594-24-1361

◎補助金の額

事業企画実施に要する交付対象経費の80%以内の額で30万円を限度とする。

◎応募の方法

文化協会事務局(教育委員会文化課内)で申請書類を受け取り、同事務局へ申請する。(文化協会のホームページからもダウンロードできます)



◎文協文芸

短歌

信綱・石取など

個人会員 松井 久雄

〈佐佐木信綱・作歌八十二年〉

- ★古典科の信綱さまのお話を読みかえすほど心のなごむ
- ★講義中「そうでげして」をくり返すげして先生真びつたり
- ★「どうもその奇なこと」という師にはどうも先生と信綱様も
- ★師の机上に梟の子置いたとのいたずら学友まこと頼もし
- ★梟をもらっていつてよいのかとお尋ねの師と信綱さんら
- ★鼻さきに眼鏡をかける事務の娘に「空みつ」という名前進呈
- ★人の心の悩みの中にも美はあるとの大人の言葉に暫し息のむ
- ★ゆつたりと信綱の歌読みゆかん心のはずむ自伝三部作

〈石取祭〉

- ★日本一やかましい祭わが桑名下ドンチキチン鉦と太鼓と

★町ごとに町屋川原の石奉る春日神社の社殿近くに

★江戸初期の桑名城下に始まった石取祭を奇祭という人

★東日本復興祈願とこの夏の祭車はかかげる常になきこと

★「撫子の夜は開く」と昼ひなか歌いゆく若き浴衣の娘らは

〈床屋さん〉

★わが町のブラージュという床屋さん元氣澁刺迎えてくれる

★ご自分のおでこの上の髪僅か少しかがみしマスター温顔

★シェービングそれは髭剃しゃれてるなずんずんぎしぎし手捌きよろし

★ドライヤーずんぐり頭に被しくれほんのり温し楽の音聞こゆ

★前頭部のわが髪少しうすき今左にながしてと我は注文

一楓・山城顕彰短歌

小・中学生 作品

金雀枝短歌社

高橋 フクミ

みずたまりうつるじぶんにいしな

げて一度ゆがんでまたうつるほく

夏の日に転校していく君がくれた

えんぴつ今も使えずにいる

六年 末吉 宇翔

冬の朝まどがくもつて子供きてち

いさいおててペンにしてかく

大好きな福島県のばあちゃんとし

緒に食べたい甘いスイカを

祖母からの箱でにこにこ笑つてる

夏野菜たちはじまりを告げ

トンネルで「アー」とさけぶとこ

だまするほどの秘密のストレス解

消法

六年 園田 大翔

雨の日にけんかした後の帰り道雨

でごまかす自分の涙

六年 杉浦 一瑠

そよ風がのどかな草むら海にする

僕はみんなと泳いでみたい

六年 鳩崎 凌太

暑い日はアイスひと口かぶりつき

たちまち口だけ南極みたい

六年 水谷 拓真

汗かいてまつげに汗が付いていた

見るもの全てキラキラ光る

六年 稲葉 優華

朝の空晴れでも雨でも曇りでも

「よしっ」と一息今日が始まる

夏の夜星が描いた柄杓見てふと思

い出す祖父との打ち水

中二 阿部 杏果

梅雨の蟻雨が降るたび家修理「ふ

う」とため息聞こえてきそう

中二 三苦 華子

里帰り昔なつかしだがしやであの

おばちゃんが元気にしてる

中二 伊藤 廉

多度山の新緑あざやか目が覚める

ペダルを踏んで朝練へ行く

手を振った君の笑顔を思い出し線

香火花ぼつりと落ちる

中二 石川 佳希

透き通る川の底にはゆらぐ草そよ

風吹く日の野原のように

中二 出口 歩

フルートで小鳥のさえずり目指し

中私音は虫の鳴き声

中二 宮本 瑞基

たて干しであしのまわりをおよい

でるさかなのからだするするして

中二 吉田有里菜

若草の田んぼの小道自転車風を

受けつつペダルふみこむ

中二 小西真由子

中一 北出 幸太



金雀枝会員短歌

枯草を燃す煙立ちあるなしの風に
従い宙へと消ゆる

石川 稲子

早朝を九十廻ぼつと耕す黒土
夢のふくらむ

石川富士子

気の付けば蟬の鳴き止み朝の雲た
なびき渡る秋の気配に

伊藤 さくえ

網に干す大根冬の陽をうけて白く
しんなりそり返りくる

伊藤 紗代

一楓師の表彰状にはげまされ金雀
枝樂しむもう七十年

伊藤 環

送りきし夏の旅行の写真集スラリ
伸びたる女孫まぶしき

伊藤美咲子

ゆつたりと河は流れてあらたまの
年のはじめの光ゆらめく

岩花キミ代

「また来てな」握れる母の手の温
み蘇る今宵ふいに会いたし

上田 順子

来る日くる日太陽を着て育ちたる
稲穂するどく黄ばみ初める

上原巳喜子

絵はがきの僅かなスペースに孫へ
書く平仮名ばかりの文字が揃わず

海老原秀世

コンバイン刈田に一台置かれいる
人影なくて雨の降り出す

大石 朝子

昼間見し山茶花の花闇に置き月な
き空に星は輝く

大平 千歳

向う岸を昇りてきたる初日の出生
きる力の自づから沸く

岡本 節子

二歳児とひと日留守番絵かき歌ま
るまる三つほらアンパンマン

加藤よしみ

誕生日の祝は孫の手作りのミサン
ガ細い紅白のひも

久保 正子

新春の白魚漁の解禁日浜の活気を
風の運び来

黒田美代子

チャイム鳴り見ら一斉に教室へ
ボール一つが残りころがる

窪田 靖子

とりどりの庭花いだき墓参する時
には母に甘えてみたり

後藤 明美

産土の天神さまに先ず詣つ老いつ
つ健康吾が誕生日

小林三江子

駅近き家に嫁しきて五十年始発電
車にけさは目覚むる

近藤 光子

こもりくの泊瀬の御寺にふる翠雨
盛りをすぎし牡丹ぬらす

斎田 眞希

黒雲が遮光めがねとなりしとき裸
眼にて見る金環日食

三田香代子

数式を解きゆく速さを目にしつつ
若きらと並ぶ午後の電車に

高橋 典子

まつさらな日の差す部屋に二人し
て少なくなりし賀状を捲る

高橋フクミ

裏庭の一群れ燃ゆる彼岸花びしび
し手折り白磁に活ける

立松 鈴子

羽化したる揚羽蝶を秋空に放てば
幼は口開けて見つ

田中 流石

手を上ぐるわれを見つけて駆けて
くる児の背はみ出すリックのをど
る

千種てい子

秋茄子の下草ぬき終へかけ声に立
ち上がりたり米寿の夫と

月井 和恵

課題図書は漱石の「こころ」と言
ふ孫が腹ばひに見る電子書籍を

土井寿美子

見はるかす金茶のまぶし麦熟るる
畑を一筋鉄路の走る

内藤みち子

正月を帰りし孫らのお土産は多き
おしゃべりと元氣と希望

中村 里子

花言葉ラブ・イン・ア・ミストの
クロタネ草白花のみが夕闇に浮く

西塚 郁代

上げ潮は川の流れとせめぎ合ひ盛
り上がりつつ川のぼりゆく

西羽加代子

ネックウォーマー鼻まで被ふ高校
生らの自転車梅の咲く道をゆく

服部ふさ子

九人目の孫の嫁ぐ日決まりしと親
が来て言ふ敬老の日に

早川 幸子

鬼百合が反れるだけ反る昼さがり
オリンピック会場より君が代ひび
く

前田 誠子

青空の過去とふ窓をあけてみる生
きこし昭和の懐かしかりし

松岡 綾子

姪の住む大連いかに報道の反日デ
モは烈しさを増す

水谷 郁子

弓形の日本列島いよ右へ右へと
傾ぎ立つ秋暗し

水谷貴美子

手の皺も紅く染めつつ紫蘇をもみ
十六キロの梅を漬け上ぐ

三林 牧子



川柳

くわな川柳会

梶 泰栄

太陽に惚れた雪から消えていく
運のいい人だ遅れてバスが来る

川瀬 秋廣

人間の性分みせる詰め放題
貼り薬肩から背中膝へくる

清水 健吾

清流が原始の愛を知っている
大難を受けて家族の愛を知る

森 繁生

残照の枯野が似合うひとり旅
反戦のうねり大きな渦描く

水谷 真

官僚は無駄を残して天下る
天国で母は見ている真央が舞う

真田 五市

ロウバイが梅はまだかと風に問う
久しぶり日本人だよ関脇は

木原 広志

女もう忘れた顔へ紅をさす
フラダンス腰のくびれが懐かしい

多度グループ

川畑 義之

飲みすぎをカルテが強く戒める
流浪する民を眺めている政治

水谷 陽子

若者が優先席にいる車内
さびしいと言わず独居にある自由

草薙 尚子

絵ごころがあればと思う七分咲き
外出の夫をこころよく送り

伊藤 章子

ばあさんと他人の口に言わせない
言い訳をして満腹がまだ食べる

菅原 節子

幸せは心を開く友がいる
久しぶり開けた針箱針が錆び

柳界のため息

木原 広志

高齡と病気のため川柳会の会員
が減り昔日の面影はない。

名古屋で会員数を誇った、中日
川柳会も五〇〇人を割ってしまった。

平成八年、二〇〇名近い仲間
で作った川柳広志会では、誌上大会
の参加者が激減して採算がとれな
くなり、昨年、第六回を以て残念
ながら廃刊を決めた。

現在、投句マニアを含めて川柳
らしきものを作る人は多い。又ど
この吟社にも所属していない柳人
も少なくない。

先日、名古屋の鶴舞図書館が無
料で会議室を貸してくれる話を耳

にした。

そこで無料の「川柳入門講座」
を開き図書館へ足を向ける人たち
へ受講を呼びかけることを思いつ
いた。

実は昨年の夏、愛知大学の車道
校舎の一室を無料でお借りできる
ことになり、川柳ではなくはがき
絵教室を無料で開いたところ四十
人近い参加があり、無料の魅力
を感じた。

昔、先輩たちから「川柳は金を
払ってまで教えてもらうものでは
ない」ときいた。

思えば私たちは入門講座とは無
縁でいきなり句会へ出て、体でお
ぼえたものである。

川柳はヒラメキで作れと教えら
れていたが、最近の川柳は詩のよ
うになってしまい、柳味がなくな
ってしまった。

「笑いのない川柳は塩気のない
漬物のようなものだ」とは先人の
名言である。

無料の講座では笑いのある川柳
を吹聴したいと思っている。

限取のこと

木原 広志

国語辞典によれば限取とは「歌
舞伎俳優が絵の具で顔に線をか

こと」とある。

以前黒塚の楽屋の放映で四代目
猿之助を襲名する限取を見てその
時、

名跡を継ぐ限取の手が弾む
の句を作った。

三月大歌舞伎は、御名残御園座。
以降は花道のある金山の旧市民会
館での興行となる。

伝統芸能の歌舞伎が観客の激減
を取沙汰されて久しい。同時に歌
舞伎を語れる老人もいなくなっ
た。

酷評すれば自称歌舞伎通のご婦
人も芝居より役者を見に行く人が
増え、氷川きよしのステージヘラ
ンプを振る熟女と差がなくなっ
た。

話を限取へ戻そう。

色紙へ限取を描き、余白へ前述
の句を画賛して、今居住する老人
施設で掲出したところ三人の方か
ら所望された。

その内無謀にも三月来演の猿之
助さんに押しつけることを思いつ
いた。

昔とちがい役者へ色紙を贈る無
謀な人はいないだろう。

楽屋まで入ると高価な手土産が
いるから、楽屋の受付の人へ託そ
うと思う。(中日川柳会相談役)

現代詩

現代詩やまぶき

温もり

岡本 妙子

日が少し長くなって
そこまで来ている春が
大きく息をした日の
午後のこと

庭で取れた金柑の実と
菜花のつぼみを
両手で掬って
届けてくれた人は
少し荒れた手を
鈍く光らせた

陽だまりの下で
今にも
枯葉になりそうな
小さな影に
春日の温もりを
そっと届けようと・・・

寡黙に澄んだ時間をかき分け
優しい目で
少し先に見える
桜の花の香を
ほんの少し匂わせた

人は時々考える
巡り合う不思議を・・・

それは
偶然なのか
必然なのか
偶然の度に
しばし考えこむ

そして
いつも
ありがとうの
温もりを抱く

父の海

堀川 孝子

九十五歳になった母は
戦死した父の顔を
「忘れた」と言う

——ダンピール海峡 ヒインシュ
ハーヘン 東南三十キロ 戦
闘において 前進 爆走

一枚の黄ばんだ公報
その海を確かめるすべもないまま
母は毎日呪文のように唱える
六十七年が経ったいまも
遺骨の収集は続いているが
父はまだ帰らない

私は幼かった頃
よく母を困らせた
お腹の中にいた私を遺して
行ってしまった父

——おとうさんとは
やわらかいのか
かたいのか

「夢とはどんなもの」と聞いた夜
「たかこ」「たかこ」と呼ぶ声が
した
船乗りだったという
父の声だと思った

飛び起きて
押入れを開け
戸棚を開け
玄関に飛び出した
母に抱き留められて
目が覚めた

眉も引かなくなつて
海が見えるグループホームで
「今が一番幸せです」と
鶴を折っては
父の海へ飛ばしている

雨

安田 治三

街角に降りかけた雨
くすみただれた心の壁を

葉脈のように静脈のように
交錯したり左右に垂れながら
向きを変えては
乾いたアスファルトの上を
蛇のように這ってゆく

少しの間に濡れたウインドウ
一瞬黒い影がよぎった

細い糸の数々は容赦もなく
辺りの物を雨音とともに
色のない世界に変えて
後悔や寂寥や孤独の
黒い水溜りを
あちこちに創ってゆく

ウインドウを通り過ぎた影
あの影は人影だったか
彷徨する私ではなかったか
かつての世俗の街は
現在はゴーストタウン

たったひとつの背中だけが
遠くに小さく見えた
いかつい肩は確かに私だった
何かを避けているかのよう
建物の陰へ消えていった
過去か未来かも判らずに

雨足は総てを掻き消すように
さらに激しく降り続いている

桑名地名あれこれ(8)

くふなまち

社会文化部門
大河内 浩
(個人会員)

桑名は江戸時代東海道五十三次の昔から、舟運でも大いに栄えました。港町であり、宿場町であるという端的な表現として「船馬町」という地名がありますが、これとは別に舟町という所がありました。現在の六華苑住吉浦から田町交差点へ至る広い道路の辺りを中心に東西にわたって点在しました。

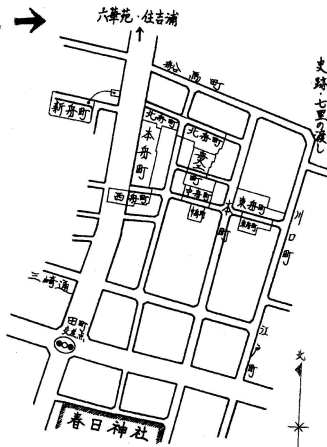
舟町は、舟運に係る水夫(舟子)たちの居住区として、俗に五舟町・二舟町と分称される七つの地区でそれぞれが数軒から十数軒、また各戸の間口も一間半から二〜三間という非常に狭小な街区でしたが活気にあふれ、江戸時代中期に編纂された「久波奈名所圖會」には隣町の風呂町の由来として、この舟町の舟子たちで大いに賑わった大きな風呂屋があったと書かれています。そして同書に所収の享和二年(一八〇二)石取祭車順番表でも、舟町組として一つの組合で形成しており、それぞれの地区で一台ずつ、七台の石取祭車を所有していたことがうかがえます。戦災復興土地区画整理によって

広い道路が敷設されて旧状は一変し、舟町は解散、このうち四つが小網町と合併して昭和二十七年九月四日に春日町が誕生し、昨年は六〇周年ということで春日町では石取祭車奉曳による記念行事が行われました。

往年の舟町の所在地 →



平成17年6月8日の、第62回御遷宮御神木奉迎祭では、かつての舟町があったあたりの広い道路に石取祭車が勢ぞろいしました。



平成24年度新入会員

○廣山 三千代
個人会員 (染色工芸)

○オカリナ「くわなくも」
代表 伊藤 清美(オカリナ)

○城田 吉孝
個人会員 (郷土史・文化財)

○ハーモニカ・モーターズ
代表 藤井 弘(ハーモニカ)

○安倭民謡 竜鳳鼓謡会
美湖滋社中

代表 安倭 美湖滋 (民謡・三味線)

○水谷 隆司
個人会員 (水彩画)

○水谷 隆司
個人会員 (水彩画)

○水谷 隆司
個人会員 (水彩画)

○水谷 隆司
個人会員 (水彩画)

○水谷 隆司
個人会員 (水彩画)

○水谷 隆司
個人会員 (水彩画)

○水谷 隆司
個人会員 (水彩画)

第21回総会のべ案内

日時 平成25年5月12日(日)
午前10時から

(受付は午前9時30分から)

会場 桑名市大山田「コミュニティ

プラザ 中会議室

※各部門から代議員の選出をしていただきます。詳しくは、各部門の理事から連絡します。

編集後記

文化芸術の活動の中で、各部門の心の交流、或いは意志の共有ができる広報紙の存在は、有意義であり、各会員の楽しみでもあると思います。

城下町である桑名は、文化の発信にはまさに適所であると思いますし、そのような中で各部門のご活躍により、桑名に於ける文化芸術が開花していると感じます。

平成に入って二十五年という節目に当たり、なお一層発展的な観点にて、文化協会とも歩調を合わせて行きたいと思っています。前年度も予定されていきました各部門各行事に於きましても、差無く立派に遂行されました。また次なる活動に向けて鋭意充電中と観察いたします。

会員と致しまして、今後とも文化協会の発展を願うばかりでございます。(三浦幸子)

広報担当副会長

委員 文学部門

美術部門

音楽部門

芸能I部門

芸能II部門

芸能III部門

演劇部門

社会文化部門

茶華香道部門

趣味教養部門

中山 雅幸

高橋フクミ

松井 勝

菅原 真治

渡邊 法子

尾崎三千男

武者真理子

相原 千景

大河内 浩

三浦 幸子

加藤 誠